言語名「英語」の確立

田野村　忠　温

The establishment of the language name *Eigo/Yingyu* for English

TANOMURA Tadaharu

The etymology and history of the Japanese/Chinese name *Eigo/Yingyu* for the English language has remained barely examined. This article will demonstrate that *Eigo/Yingyu* became the conventional name for English as late as in the second half of the nineteenth century, and that thitherto there were various names for English both in Japanese and in Chinese. It will also be discussed whether or not one of the two languages exerted influence on the other with respect to the creation and/or spread of *Eigo/Yingyu*.

キーワード：「英語」，言語名，語史，近代日中語彙交流

1　はじめに

日本語，中国語のいずれにおいても，英国の言語は漢字表記上一致する「英語」という名称によって呼ばれる。「英語」は「英吉利語」ないし「英吉利国語」の短縮形である[1)]。しかし，英語は歴史を通じて「英語」と呼ばれてきたわけではない。その名称が普及したのは19世紀後半以後のことであり，それまでの時期には日中各語においてさまざまな名称が使われていた。

この小論では，英語の名称の日中両語における変遷を資料の調査に基づいて跡付ける。「英語」は数ある言語名の中で日中語史研究上の価値が格別に大きい。英語は近現代の日本，中国にとって不可欠の存在であるのみならず，現代の日中両語において名称が一致する数少ない言語の１つであり，アジアの言語を除けば唯一の言語であるからである[2)]。近代日中語彙交流の観点から，「英語」の発生と普及に関して両語がどのような関係にあるのか，すなわち，いずれかの方向での影響があったのか，それとも，各

１）一口に短縮形と言っても，日中両語で短縮の内実に違いがある。中国語では「英吉利（国）語」の中間を省くだけで「英語」が得られるが，日本語の「英吉利語（イギリスご）」から「英語（えいご）」に至るには語種，発音の転換（字音語化）を要する。

２）強いて言えばほかに「西班牙語」と「葡萄牙語」の短縮形である「西語」「葡語」もあるが，日本語ではいずれも化石的な表記専用語に過ぎない。

語で独立に「英語」が発生，普及したのかということが問題となる。

日中語彙交流の研究において，固有名詞のうち国名を始めとする地名に関してはすでに多くの知見の蓄積がある。それとは対照的に，言語の名称は言語に関する研究に携わるすべての者にとって身近な重要語であるにもかかわらず，それを主題とした考察はほとんどない。それは，言語研究者にとって言語名はあまりに身近であるために，考察の余地のない自明のものと受け止められてきたということかも知れない[3)]。

2　日本語における英語の名称

日本人の英語との接触は，1600（慶長５）年における英国人ウィリアム・アダムズ（William Adams，後の日本名三浦按針）らを乗せたオランダ船の漂着に始まるとされる。日本語を習得したアダムズによる英国王親書の翻訳が以心崇伝（すうでん）『異国日記』――17世紀前半の外交記録――に収められているが，当時の文献中に英国の言語への言及を見出すことはできない。

2.1 「アンゲリア語」「アンゲリア言語」など

英国の言語が日本の文献に現れるようになるのは，アダムズ漂着の２世紀後，19世紀初頭のことである。

古賀（1947）は，地理学者山村才助が「英語に興味を持つてゐたらしい」と述べ，1801（享和１）年に山村が著した『西洋雑記』の一節を引いている。『西洋雑記』は複数の書写年不明の写本と1848（弘化５）年の刊本としてのみ伝わる。古賀の引用は近藤正斎（せいさい）『好書故事』（1826（文政９）年）における部分的な引用に基づいているが，ここでは国立国会図書館蔵の書写年不明の写本から引用する[4)]。以後，引用に際して漢字は原則として現代日本の字体による。また，句読点の挿入を中心とする調整を適宜施す。

> 万国伝信記事にいはく，欧羅巴洲中諸国その言語の原始およそ三種あり。（中略）第二は入爾馬泥亜（ゼルマニア）語なり。これ和蘭，諳厄利亜（アンゲリア），弟那瑪爾加（デユネマルカ），雪際亜（シエユシア）[5)] 等諸国の言語因て出る所なり。（中略）曽て入爾馬泥亜，弟那瑪爾加の語を以て和蘭の語に参考するに，其語多くは相似たり。諳厄利亜の語は稍異にして，これ等に同しからざる事多し。諳厄利亜国其歴世の沿革によりて其語音もまたしばしば変せし事，西書に詳なり。　（山村才助『西洋雑記』巻之六「西洋言語の説」，1801（享和１）年）

３）佐藤（2007）は日本語における「英語」の語史を記述し，中国語での語史にも触れている。しかし，用例の観察が不十分であるうえに用例でないものが誤って用例として挙げられているなど問題が多く，信頼に足る情報源になっていない。

４）刊本は出版年は分かるが，文字表記の点で原本からの隔たりが相対的に大きいと推定されるので使用を避けた。なお，古賀の引用は『好書故事』の東京大学史料編纂所蔵の写本ではなく，その翻字版である市島謙吉編『近藤正斎全集』第三（市島謙吉，1906年）における文面に一致する。

５）「雪際亜」はスウェーデン。振り仮名の「シエユシア」は「シユエシア」の誤りであろう。

この「西洋言語の説」は欧州の言語の系統に関する簡単な紹介である。ゲルマン語のうちオランダ語，ドイツ語，デンマーク語などは互いに似ているが，「諳厄利亜ノ語」すなわち英国の言語はそれらとは異なるところが多いと言う。これが日本における英語への言及として確かめ得る最初の事例である。ただし，「諳厄利亜ノ語」「諳厄利亜国ノ言語」は言語名として１語化してはおらず，説明的な句の段階にとどまる[6)]。

山村は上に引用したくだりに続けて，“これらのことは少々考えるところがあって実は書いているものがあるが，いまだ脱稿しない。文字と言語に関わることはすべて後日別のところで詳しく述べる。”と記しているが，そのような著作の存在は知られていない。

「諳厄利亜」は英国を表すラテン語名 Anglia の音訳であり，入華イタリア人カトリック宣教師マテオ・リッチ（Matteo Ricci，中国名利瑪竇）の『坤輿万国全図』（1602（万暦30）年）で使われている。

19世紀の初期には英語学習の幕命を受けたオランダ通詞による英語の語学書３点が相次いで著されており，そこには一語化した英語の名称が現れる。1810（文化７）年から翌年にかけて吉雄権之助らの著した『諳厄利亜言語和解』は書名に「諳厄利亜言語」，跋文では「諳厄利亜語」の名称を用いている。また，1811（文化８）年，1814（文化11）年に本木正栄（庄左衛門）らの著した『諳厄利亜興学小筌』，『諳厄利亜語林大成』では英語は「諳厄利亜語」「諳厄利亜国語」と表現されている。

ほかに，小原巴山他『長崎志続編』巻七，巻九，巻十一（成書年不詳）に収められた英国軍艦長崎港侵入や長崎通詞に関わる記録においては英語は「諳厄利亜語」や「諳厄利亜言語」に加えて「諳厄利亜ト云言語」としても表現されている。「諳厄利亜」は多く国名として使われているが，言語名としても認識されていたことになる。

以上のように，19世紀初期の文献における英語の名称は「諳厄利亜」「諳厄利亜語」「諳厄利亜言語」などであった。なお，読みの示されていない漢字表記の当時における読みについて確実なことは分からない。例えば，「諳厄利亜語」の「語」は現代の表記の慣習に頼って考えればゴとしか読めないが，後には「英吉利語」という表記の例も見られるので（後述），コトバと読まれた可能性もある。また，「言語」の読みは『諳厄利亜言語和解』という書名の文脈ではゴンゴさもなくばゲンギョであろうが，「彼ハ何国言語ゾ」のような表記の例も見られる。

「漢乂利亜」とも書かれる「アンゲリア」「アンゲリヤ」の国名はその後間もなく，「英吉利」「暎咭唎」「英傑列」などの漢字表記を持つ「イギリス」――「エゲレス」「エギリス」「エンゲリ」「インギリス」「インゲリシ」などの異形もあった――に取って代わられ[7)]，言語名としての「アンゲリア語」もそれに

6）杉本（1985）も『西洋雑記』の同じ一節を引き、「才助にこそ日本の英語学の祖の名を与えたい。これまでの日本英学史にはまったくふれられていないところである。」と書いているが、古賀（1947）の指摘を知らなかったということに過ぎない。

7）日本における英国の国名の変遷については竹村（1932），荒尾（1983），王（1995），孫（2015）を参照。荒尾は日本語における英国の名称が「イギリス」系，「アンゲリア」系，「大ブリタニア」系に大別できるとしているが，竹村の詳細な観察によれば実際のところはさらに複雑で，本稿末の英語名称年表にも見る通り，「イングランド」系として一括すべき名称もあった。なお，「イングランド」系の名称は英国全体を指すのに使われている場合とスコットランドなどとの関係においてもっぱらイングランドを指すのに使われている場合とがある。

伴って消滅した。もっとも，「諳厄利亜」や「漢乂利亜」に「イギリス」「エンゲレス」などの読みが添えられている事例もあり，漢字表記と読みの関係は単純ではない。

2.2 「イギリスことば」「イギリス語」など

19世紀半ばには，英語は「イギリスことば」「イギリス語」などの名称もしくは漢語の「英語」によって呼ばれるようになる。

まず，「イギリスことば」「イギリス語」の初期の用例の一部を示せば次の通りである。

> エギリス語はアメリカ語と同じと漂民いへり。故にエギリス語と称する条なし。
>
> （遠藤高璟（たかのり）編『時規（とけい）物語』巻之九，1850（嘉永３）年）
>
> 右条約附録エゲレス語，日本語に取認名判（なはん）致し，蘭語に翻訳して其書面を合衆国並日本全権双方取替すもの也。
>
> （「下田条約」，1854（嘉永６）年）
>
> さて此日金曜日（フレイダフ）なりければ，やがて此ものゝ名を弗麗独（フレイダフ）とよび，つとめて英吉利語（イギリスコトバ）を教へ習はせけり。此者英吉利語をいと容易（タヤス）く習ひ覚えけり。（横山保三訳『魯敏遜（ロビンソン）漂行紀略』，1857（安政４）年）

口語的な文脈に現れた用例には次のようなものがある。「イギリスことば」「イギリス語」のほかに同類の名称として「インゲリシ口（くち）」「インゲリシ話（はなし）」もある。

> Can you speak English?
>
> かなくりか[8] あなた 咄ら エンゲリシ
>
> （中浜万次郎訳『英米対話捷径』，1859（安政６）年）
>
> Can you speak english.　アナタ ニハ イギリスコトバ ガ デキル カ
>
> I can’t speak english.　ワタクシ ニハ イギリスコトバ ハ デキヌ
>
> （福沢諭吉編訳『増訂華英通語』，1860（万延１）年）
>
> Will you teach me the English languge（ママ）
>
> アナタワ ワタクシニ インゲリシ クチヲ ヲシエマスカ
>
> Learn the English language and you can speak with all
>
> インゲリシ ハナシヲ マナンデ ソーシテ アナタ ミナト ハナスコト デキマス
>
> Nearly every foreigner speaks English
>
> ノコラズ ガイコクヂンワ インゲリシ ゴヲ ツカハヌ[9]
>
> （ウエンリイト『和英商話』，1862（文久２）年）

中国においては「諳厄利亜」「昂利亜」の使用例は少なく，早くから「英吉利」「英機黎」「英圭黎」の類の名称が普及した。日本における「アンゲリア」から「イギリス」への名称の交替はそのことの反映であろう。

8）「かなへりか」は奇妙な表現であるが，原文における表記が筆者にはそのように見える。

9）この日本語文は無論誤訳である。nearly には「ケッシテナイ」という誤った語釈が与えられている。

Do you speak English?

アナタ ハ イギリス ノ コトバ ヲ オツカエナサレマス カ

オマエ イギリス ノ コトバ ヲ ツカエル カ

（Samuel Robbins Brown *Colloquial Japanese*, 1863, Shanghai）

先に触れた通り，「～語」と書かれた言語名の「語」は当時コトバとも読まれていた（2.1）。例えば，上掲の横山保三訳『魯敏遜漂行紀略』の用例では「英吉利語（イギリスコトバ）」と書かれている。また，少し時代の下った前田元敏（もととし）訳『英和対訳大辞彙』（1885（明治18）年）には「English, *n.* 英吉利人，英吉利語（ゴ）」という記述がある。「語」にのみゴの読みが示されているのは，それをコトバと読む慣習の存在を念頭に置いてのことであろう。[10] 読みの明示されていない「語」が書き手の意識においてゴとコトバのいずれであったのかは今知る由がない。「英語」という表記でさえ，エイゴと読まれていたとは限らない。尺振八（せきしんぱち）・須藤時一郎（ときいちろう）『傍訓英語韻礎』（1872（明治５）年）には「英語（イキリス）」と「英吉利語（いぎりすことば）」という表記が見られる。前者の読みもイギリスコトバであった可能性がある。

「イギリスことば」と「イギリス語（ご）」の関係について言えば，漢語を含まない前者が口語的な名称であったことは，それが会話書の文例に多く現れることから知られる。

「イギリスことば」「イギリス語」はその後「英語」の普及によって使用が減っていく。しかし，19世紀半ばには廃れた「アンゲリア語」とは異なり，「イギリス語」は少なくとも20世紀の前半までは広く使い続けられた。

2.3 「英語」という語の初出例

1840（天保11）年に幕府天文方の暦学者渋川敬直（ひろなお）によって翻訳された『英文鑑（かん）』に「英語」という語が出て来ることを孫（2015）が指摘している。同書は，米国に生まれ英国に移住した文法研究家リンドリー・マレー（Lindley Murray）による英文法書に基づいてオランダ語で著された*Engelsche Spraakkunst*を日本語に訳したものである[11]。

『英文鑑』に「英語」は１度だけ出現する。巻頭の凡例の１項目として次のように述べられている[12]。

一　英語之傍訳一一附挑乙頗渉繁雑，故復書其訳義。如直読傍訳而義通者則否。

10）理屈の上では，ゴの読みはギョとの区別のために加えられたということも考えられるが，イギリスギョという読みの存在は調査の限り確認できていない。

11）『英文鑑』をマレーの文法書の重訳とする説明が語り継がれ通説化しているが，不正確である。杉本編著（1993）に指摘のある通り、*Engelsche Spraakkunst* はマレーの著の単なる翻訳ではなく、独自に蘭文英訳の練習問題を増補している。しかも、その量は非常に多く、『英文鑑』の例えば上編巻之二の全体、同巻三の３分の２程度を占める。最初の数巻を軽く確かめた印象の限りでは、マレーの著に由来する――したがって、重訳と形容し得る――部分は『英文鑑』の半分程度に過ぎない。

12）『英文鑑』の参照は1928（昭和３）年刊の大槻如電（じょでん）による謄写復刻版によった。奥付には「著者 故渋川六蔵」「相続者，発行者 渋川民子」などの表示がある（「六蔵」は渋川敬直の通称）。復刻版の原本である著者自筆稿はもはや所在不明のようである（中村（1993））。

（渋川敬直訳述，藤井質（ただし）訂補『英文鑑』「凡例」，1840（天保11）年）

これは，“（文例の説明において）英語の脇に示す語釈に一々（漢文風に）返り点を加えるのは煩雑なので，（その代わりに）語釈とは別に訳文を記す。（ただし，）語釈をそのまま読んで意味が通る場合は訳文は記さない。”ということであろう。例えば次の文例２件の説明に見られる対比を指しているものと見られる。原文では日本語は縦書きである。

我等ハ　ン　今　語ラ　其事ヲ
We　are　now　to treat　of it.
　我等ハ今其事ヲ語ラン　（『英文鑑』上編巻之十五）
与ヘヨ　我レニ　少シ　葡萄酒ヲ
Help　me　to some　wine.　（同上）

最初の例では語釈をそのまま読んだのでは意味を成さないが，「我等ハ㆑今語ラ㆒其事ヲ㆑」などのように返り点を添えるのは煩わしいので，「我等ハ今其事ヲ語ラン」という訳文を掲げ，他方，第２の例では語釈だけで文意が通じるので訳文は示さないということだと思われる。

ただし，『英文鑑』の「英語」を言語名と見てよいかどうかは明らかではない。「英語」は文意上“英国の言語”ではなく，“英語の語”，すなわち，英単語を表しているように思われるからである。渋川は凡例の冒頭で翻訳の経緯を述べ，「英吉利国」について「其語与文与和蘭殊異。」――“イギリスの語と文はオランダと大きく異なる。”――と説明している。そこでの「語」は明らかに言語ではなく単語である。

もっとも，凡例の「英語」が言語名ではないと言い切れるわけでもない。現代においては「英語」という語は無自覚的に相異なる意味に使われる。例えば，「英語の本」「英語を学ぶ」などと言うときの「英語」は言語を指し，「philosophy という英語」「空所に適切な英語を入れよ」「この英語は間違っている」などと言うときの「英語」は語や文を指す。しかし，通常そのような二義性が意識されることもない。渋川も言語か語かを特に区別することなく「英語」を使ったという可能性もないとは言えない。

先の引用に見る通り，「英語」が現れる凡例は漢文である。渋川は『英文鑑』の本文においては英語を一貫して「諳厄利亜語」と表現している。次にその２例を示す。第１の例は *Engelsche Spraakkunst* における蘭文英訳の問題文と『英文鑑』で添えられたその日本語訳の組合せである。

De Engelsche taal is even zoo moeijelijk als de Fransche.
　諳厄利亜語ハ払即（ママ）察[13]ノ如クニ困難（ムツカシ）ナリ　（『英文鑑』上編巻之三）

彼レハ　心ヲ尽シタリ　諳厄利亜語ニ
He　applied himself　to the english language.　（同巻之十五）

13）「払即察」は「払郎察（語）」のおそらく復刻時における誤写であろう。

かりに凡例の「英語」が言語名であったとしても，渋川は「英語」と「諳厄利亜語」を文体的に使い分けていたことになる。実際，その後の英語の名称の使用状況からも，言語名の「英語」は漢文ないし書面語の文脈において使われ始め，後に口語の領域にまで使用が拡大したものと見られる。

2.4　言語名「英語」の初出例

日本の文献における言語名としての「英語」の確実な初出例は，筆者の確認の限りにおいて，『英文鑑』成稿から11年後の1851（嘉永４）年に著された西成量（なりかず）らによる英和語彙集『エゲレス語辞書和解』――Ｂの部の途中で終わり，完成には至らなかった――開始巻（Ａ之第一）の序に見出される。そこでは，英語はまず「喫咭唎語」という形の表現で導入され，以後は「喫咭唎」そして「喫語」と短縮して呼ばれている。「喫咭唎」の意図された読みは表紙の書名にある「エゲレス」であろう。

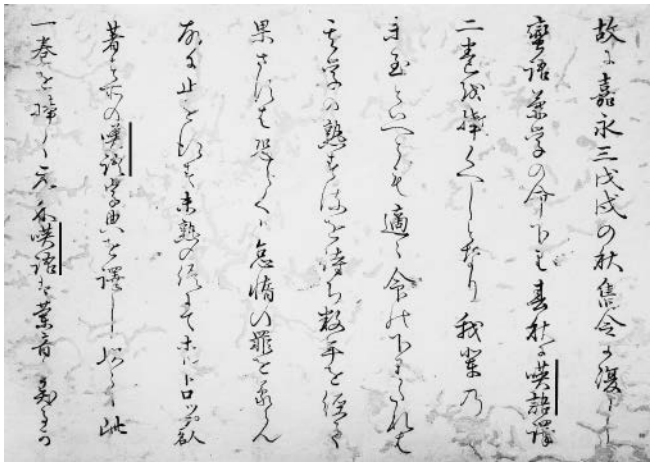


図１　西成量他編『エゲレス語辞書和解』

同書の序は荒木（1931）以来多くの研究者によって翻字されているが，誤読による不一致が多い。長崎歴史文化博物館蔵本の確認に基づく文面を次に示す。［　］は紙の虫食いによってその位置の字が失われていることを表す。

> 皇国にて喫咭唎語を学ふ始は，文化の度我先輩魯西亜語，諳厄利亜語兼学の命を受け，喫咭唎字彙，噺書数巻を訳し[14]，之を公館に捧け，其後絶て伝らす。然るに近年異船の来ること屢にして漂流の異民頻に多し。是に語の通るは喫咭唎のみなり。故に嘉永三戊戌[15]の秋旧令に復し蛮語兼学の命下り，春秋に喫語訳二巻を捧くへしとなり。我輩の［学］[16]未至といへとも適々（たまたま）命の下りたれは，其学の熟

14）ここで言及されている“英語の語彙集，会話書数巻”は明らかに吉雄権之助らによる『諳厄利亜言語和解』や本木正栄らによる『諳厄利亜興学小筌』『諳厄利亜語林大成』（2.1）を指す。

15）嘉永３（1850）年の干支は正しくは庚戌。

16）従来の翻字にならって「学」を補った。ただし，荒木（1931）所載の写真に写った字画の断片にも見えるものは序に５度現れる「学」の筆跡に一致せず，「学」の最初の３画を配置すべき場所もない。もっとも，それは字画ではな

するを待ち数年を経て果さすは恐らくは怠惰の罪を蒙らん。故に止を得す未熟の儘にてホルトロップ人名著す所の喫語字典を訳し，以て此一巻を捧く。元来喫語は蘭音［に］[17] 異るかゆゑ，横文字の側に片仮名を以喫音を詳にす。（後略）

（西成量他編『エゲレス語辞書和解』序，1851（嘉永４）年）

序に「喫語」は３度現れ，それぞれ“英語の対訳辞書２巻を献上する”，“ホルトロップ著の英語字典を訳す”，“英語は発音がオランダ語と異なる”ということであるから，いずれも個別の語ではなく言語を指していると言える。

2.5 「英語」の普及

『エゲレス語辞書和解』に次ぐ言語名「英語」の使用は，フランス語学者村上英俊（ひでとし）による英仏蘭の対訳語彙集『三語便覧（べんらん）』に見られる。

余因述此書以便読原書者。初学因此書闇記仏語則仏籍可得而読，闇記英語則英籍可得而読，闇記蘭語則蘭籍可得而読。（村上英俊『三語便覧』凡例，1854（安政１）年）

“英語を覚えれば英国の書籍を入手して読むことができる”という説明であるから，この「英語」も言語を指している。ただし，『英文鑑』の場合と同じく，「英語」の使用の文脈は漢文で書かれた凡例であり，本文の語彙集の見出しには「英傑列語（エゲレスコトバ）」と記されている。

その後はほぼ毎年「英語」の言語名としての用例が見出される。初期の用例をいくつか示せば次の通りである。

合衆国全民ヲ統算スルニ，其英吉利人ノ裔タル者最多ク，殆（シト）四分ノ三ニ居ル。是ヲ以テ其語言ハ英語ヲ以テ最弘通用ノ者トス。

（和蘭人葛拉墨児（カラーメル）原撰，小関（こせき）高彦訳『新訳合衆国小誌』，1855（安政２）年）

第十四条（中略）日本語，英語，蘭語にて本書写ともに四通を書し，其訳文は何れも同義なりといへとも蘭語訳文を以て証拠となすべし。[18]（「日米修好通商条約」，1858（安政５）年）

第二十一条　此条約は日本，英吉利及和蘭語にて書し，各翻訳は同義同意にして和蘭翻訳をもと丶見るへし。都て貎利太泥亜（プリタニア）のヂプロマチーキアゲント及コンシユライ（ママ）ルアゲント[19] より日本司人に

く虫食いの痕などであった可能性もある。

17）「に」か「と」のいずれかであろう。従来両様の翻字がなされている。

18）「日米修好通商条約」および次の「日英修好通商条約」の日本語文はヨハン・ヨーゼフ・ホフマン（Johann Joseph Hoffmann）による序文のある *The Japanese Treaties, Concluded at Jedo in 1858 with the Netherlands, Russia, Great-Britain, the United States and France, Fac-Simile of the Japanese Text*（The Hague: Martinus Nijhoff, 1862）に収められた条約の影印に基づく。

19）「ヂプロマチーキアゲント及コンシユラルアゲント」は条約の英語文では‘the Diplomatic and Consular Agents’。

いたす公事の書通は向後英語にて書すへし。　（「日英修好通商条約」，1858（安政５）年）

此書ハ英語ヲ学フ者ノ為ニ著スニ非ス。只和英両国ノ商賣便用ノ為ニ編ム所ニシテ，英文モ雅ヲ用ヒス簡便ニシテ解シ易キヲ旨トス。　（本木昌造『和英商売対話集』，1859（安政６）年）

やや遅れて会話文例における「英語」の用例も現れ始める。

I　dare　not　speak　it.

わたくし　なすりこ[11]　かなさぬ　こと[1]　そのゝ英語を[20]

（中浜万次郎訳『英米対話捷径』、1859（安政６）年）

can you speak English?

汝ハ英語ヲ言フコト能フカ

always speak English.

常ニ英語ヲ言へ　（石橋政方『英語箋』，1861（文久１）年）

I am very anxious to learn English.

私ハ英語カ執心テ頻ニ習タウゴザリマス

Is it very hard to learn English at my age?

私ノ年齢ニテ英語テ咄シスルコトハ極メテムツカシウゴザリマシヨー

（品川英輔『英語通弁階梯初編』，1869（明治２）年）

by dint of stadying（ママ） you will learn english in a short time.

ゴシュツセイダカラ アナタハ ヂキニ エイゴガ デキマセウ

（島一徳訳『挿訳英吉利会話篇』巻之二，1872（明治５）年）

こうして英国の言語の名称として「英語」の勢力が増していった。当初書面語における表現であった「英語」が英語学習の普及とともに通俗化し，口頭語の領域にまで進出したものと考えられる。ただし，最終的に「英語」が定着し，「イギリスことば」「イギリス語」などの名称がほぼ駆逐された理由は不詳である。今言えるのは，「英語」の表現上の簡潔性や，当時の漢語嗜好の風潮が「英語」に有利に働いた可能性があるということだけである。

2.6　言語名としての「イギリス」

「英語」の名称の標準化までの時期においては，「英吉利」によって英語を指している事例もある。Lindley Murray『英吉利文範二編』（1861（文久１）年），足立梅景編述『英吉利文典字類』（1866（慶応２）年）のような書名に含まれる「英吉利」をそのように解釈し得る可能性があるし，次の例では「英吉利」が英語を指す単独の名詞として使われている。

20）返り点の誤りは原文の通りである。

there　are　twenty-six　letters　in　english.
夫処ニ一　有ル七　二十四　六五　文字ガ六　於テ三　英吉利ニ二

（阿部友之進『挿訳英吉利文典』，1867（慶応３）年）

「英吉利」「イギリス」は国名だという知識の干渉によって英語を「イギリス」と呼ぶのは奇異なことのようにも感じられるが，「イギリス」がそもそも英語のEnglishあるいはそれに相当するポルトガル語ないしスペイン語のInglesの発音の模写であるとすれば（竹村（1932）），それらが英語を指すのに使われるのは自然なことである。現代の語形で言えば，英語を「イングリッシュ」と呼ぶのと同じことである。疑うべきはむしろ「イギリス」を国名として使う慣習である。

「英吉利」の言語名としての使用は後述の通り中国資料中にも見出される。

3　中国語における英語の名称

中国における英語の名称の初期の歴史には日本におけるそれと大きく異なる点がある。それは，当初名称の用例の大半が中国人ではなく西洋人の著作に現れることである。それは，19世紀の日本人と中国人の英国，英語に対する意識の違い――すなわち，日本人は19世紀初頭より英語を習得すべく努力を重ねたのに対し，中国人は英国の言語を学ぶ考えをあまり持たなかったこと――の反映であろう。Williams（1836）は，清朝政府が中国人と西洋人の交流を制限し，外国人の中国語学習を禁じるなどしたことが，中国人の西洋人に対する冷淡，不信，無関心を生んだと論じている。

また，日本では言語名「英語」の確実な用例が見出される1851（嘉永４）年以後，「英語」の着実な普及が確かめられるのに対し，中国では「英語」の使用開始後もその出現は散発的である。中国では「英語」の定着に長い年月を要したと言えるが，それは英語に関心を抱く人が少なく，その名称が必要とされることが少なかったことの反映であろう。

3.1 「英吉利」「英吉利話」など

中国では明清代に編纂された『華夷訳語』の類――漢族の言語と他民族の言語の官撰対訳語彙集――の１つとして『暎咭唎国訳語』が著されている。これが中国ないし日本に現存する英語の語彙集として最も古いものである。その成書年をFuchs（1931）は1748年以後，楊（1985）は1750年前後，黄（2010）は1750年代ごろと推定し，韓（2008）だけは1793～1819年の範囲としている。同書の内容を筆者は部分的にしか確かめられていないが，おそらくそこに英語の名称は現れない。[21)]

中国人による著作である可能性が高い（黄（2010））『暎咭唎国訳語』を別とすれば，19世紀半ばまでの中国では，英語の辞書，文法書，会話書の出版はほとんど西洋人によるものであった。中には中国人

21）『暎咭唎国訳語』の内容の確認は中国国家図書館のWebサイトに掲載された同資料の紹介動画による。楊（1985）によれば『暎咭唎国訳語』には730件の語句が収められているが，動画で確かめられるのはその半数程度である。

によって著された語学書もあるが――『紅毛番話』の類の簡便な語彙集[22]や『華英通語』の類の語彙文例集[23]――，量，質ともに限られていた。

英語を表す中国語の名称として調査によって確認できた最も古いものは，“1807年にマカオでMathew Raperが書写した”（楊（2012））という『漢字西訳』英語版第1巻の扉における「字彙英吉利略解 *A Chinese Dictionary with an English Short Explanation*」という表示に含まれる「英吉利」である。楊（2012）に『漢字西訳』英語版の写真4点が掲載されており，そこに当の扉の写真が含まれる。[24] ここでの「英吉利」は形容詞として使われたEnglishの翻訳であるが，名詞のEnglishに対応する「英吉利」の使用も現にその後見られる。

> 番訳呢(這)的転英吉利 Translate this into English.
>
> （Samuel W. Bonney *Phrases in the Canton Colloquial Dialect*, 1853（咸豊3）年）

『漢字西訳』英語版に次ぐ英語の名称の用例2件は，ウォルター・ヘンリー・メドハースト（Walter Henry Medhurst，麦都思）の著作に現れる「英吉利話」と，ロバート・モリソン（Robert Morrison，馬礼遜）の英華辞典に現れる「英吉利国話」である。時代はやや下るが，カール・フリードリヒ・アウグスト・ギュツラフ（Karl Friedrich August Gützlaff，郭実臘，郭士立）の創刊した雑誌『東西洋考毎月統記伝』における，それらの短縮名「英話」の用例とともに示す。

> 問：彼国人【＝米国人（引用者注）】奉何教。答曰：彼国人倶奉耶穌教，其講的話，亦是英吉利話而己(ママ)。
>
> （麦都思『地理便童略伝』，1819（嘉慶24）年）
>
> LANGUAGE, human speech, 言語；話.（中略）The English language, 英吉利国話.
>
> （Robert Morrison *A Dictionary of the Chinese Language*, Part III, 1822（道光2）年）
>
> 大英国家勉強懋博学士，隆卓加官進爵。篤謹学問，推外国之文芸，特意教化土人。是以榜葛喇(ベンガル)人留心学英話，読英書，則学文盛焉。
>
> （「榜葛喇省略」『東西洋考毎月統記伝』丁酉正月，1837（道光17）年）

3.2 「英語」の日中初出例

稿末の英語名称年表に見る通り，中国では19世紀後半に至るまで「英吉利話」「英国話」「英話」などの名称が広く使われていたが，1823（道光3）年に刊行されたモリソンによる英文法書*A Grammar of the English Language for the Use of the Anglo-Chinese College*――中国語の書名『英吉利文話之凡

22）内田・沈編（2009）を参照。そこには8件の語彙集の影印が収められている。Williams（1836），Hunter（1882）は19世紀前半の広東で語彙集と文例集とから成る冊子が売られていたことを述べているが，おそらくその種の資料の現存は知られていない。

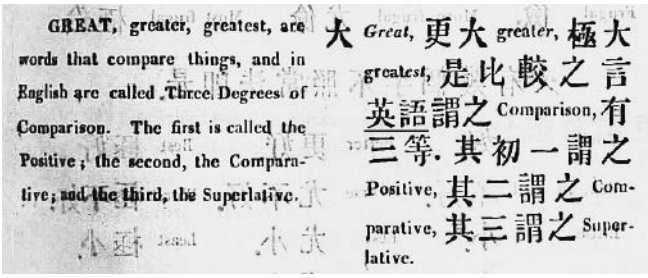
23）拙論（2018）を参照。

24）『漢字西訳』は，17世紀末にイタリア人宣教師バジーリオ・ブロッロ（Basilio Brollo，葉尊孝）の編んだラテン語の解説による中国語辞典である。

例』[25]——には「英語」の日中両語を通じての初出例が見出される。同書における「英語」の出現については，“馬礼遜（モリソン）”の作として伝わる『外国史略』の著作者の問題を論じた鄒（2007, 2008）にすでに指摘がある。本文の８か所に現れる用例のうち３件を示せば次の通りである。

所称 Article 那一類，英語有三，即 A, an, the.
英語在其 Verb 添 *ing* 纔成其現在之 Participle, 又添 *ed* 纔成其過去之 Participle, 即如 Learn 学也，Learning 現在学，Learned 学過了.
大 *Great*, 更大 greater, 極大 greatest, 是比較之言，英語謂之 Comparison, 有三等．其初一謂之 Positive, 其二謂之 Comparative, 其三謂之 Superlative.

（Robert Morrison *A Grammar of the English Language*, 1823（道光３）年）


GREAT, greater, greatest, are words that compare things, and in English are called Three Degrees of Comparison. The first is called the Positive; the second, the Comparative; and the third, the Superlative.

大 Great, 更大 greater, 極大 greatest, 是比較之言 英語謂之 Comparison, 有三等. 其初一謂之 Positive, 其二謂之 Comparative, 其三謂之 Superlative.

図２　モリソン『英吉利文話之凡例』

ただし，同書の文例での表現は「英語」ではなく，「英吉利話」である。

Can you talk English? 你会講英吉利話　（同上）

モリソンは前出の英華辞典——『英吉利文話之凡例』の前年に出版された——の English の項目において，中国の慣習では「英吉利」がその第１字の「英」に略され，Great Britain は「大英国」とも表されることを次のように説明している。

ENGLISH nation, 英吉利国.（中略）In the Chinese manner, the name may be abbreviated by using only the first word, and thus Great Britain be rendered by 大英国.（後略）

（Robert Morrison *A Dictionary of the Chinese Language*, Part III, 1822（道光２）年）

そして，辞典巻頭の「英吉利国字語小引 Brief explanation of an alphabetic language, as exemplified by the English」と題された中国語による解説には，「英字」「英文」「英国」という表現が現れる。筆者

25）この書名が本文開始頁に示され，同頁の文中に「文話之凡例」という表現が grammar の訳語として２度出てくる。しかし，扉には『英吉利文語之凡例』と記されている。

の確認の限りにおいて，同辞書が，「英吉利」を表す「英」の用例を含む最も古い中国の文献である。

しかし，それらの「英字」「英文」「英国」や『英吉利文話之凡例』に出て来る「英語」の造語者がモリソンであったと言えるわけではない。鄒（2007, 2008）は「英語」をモリソンの造語としているが，現在利用可能な情報に基づいてそのように断定することはむずかしい。今確実に言えるのは，「英吉利」を「英」に短縮した例がモリソンの英華辞典の１項目と巻頭の中国語による解説中に見出され，そして，「英語」の初出例がモリソンの『英吉利文話之凡例』における英中対訳の本文の中国語訳中に現れるということだけである[26]。

実際，「英国」についてはモリソンの著作よりも早い用例が存在する。李・朴編（2017）の「英国」の項目に『朝鮮王朝実録』における1816年の用例が挙げられている。元の資料によって確認したところ，同年に漂着した英国船の立入検査を行った際に取得した中国語文書に次のように書かれていたと言う。ここに国名の「英吉利国」と「英国」とが現れる。文中の「英国王差」は丁（1938）によれば同国“奉使諸臣”を表す[27]。

> 英吉利国水師官員下書，為陳明事，送該憲知悉。拠本年閏六月初旬間，有我英吉利国五隻船，送我英国王差正従各人到天津北運河口。今王差等俱進京朝，見万歳爺。因天津外洋水浅，遇有大風，免不得壊船，故各船不敢在彼処碇泊。今要回粤東，候王差回国，茲経過此処。請該憲給票以買食物，自取清水飲用也。左有蓋我王差印為拠矣。嘉慶二十一年月日書。
>
> （『純宗大王実録』巻之十九、1816（純祖16、嘉慶21）年）

過去の言語の考察は現代に伝わる資料に頼らざるを得ない。その結果として、ややもすれば新語はその初出例を含む資料の書き手自身が考案したという短絡的な推論を招く。書き手が著名人であればその危険がことさら大きい。陳（2011）の言う「名人造語説」である。しかし我々は、著名人に意識を奪われて、資料の陰に隠れた“名もなき造語者”の存在の可能性を忘れてはならない。たとえ新語の最初の使用例が著名人の著作に見出されるとしても、それを作ったのは別の人物かも知れず、また、特に誰からということはなく複数の人によって同時的に使い始められたということであったのかも知れない。

なお，「英語」から短縮前の名称を復元すれば「英吉利語」ないし「英吉利国語」になる――その意味において前者は後者の短縮形と言い得る――ことに議論の余地はないとしても，「英語」が現に「英吉利（国）語」から作られたことを示す証拠はない。意外にも，モリソンの著述を含む19世紀の中国の文献に「英吉利（国）語」という表現は一例も見出すことができないのである。したがって，少なくとも中国語の「英語」は，正確に言えば，「英吉利語」を短縮して作られたと言うより，「英吉利」の短縮形である「英」と「語」とを組み合わせて作られた名称であった可能性も排除することができない。

26）本文では単純化して述べたが，正確に言えば，『英吉利文話之凡例』における「英語」の用例８件のうち１件は対訳の文ではなく，不規則動詞表の見出し「凡有英語之 IRREGULAR VERB 表」におけるものである。

27）『純宗大王実録』における文書の引用には疑わしい箇所がいくつかある。本文での引用に際しては，丁（1938）を参考にし，また，一部は私意によって文面を調整した。

3.3 「英語」初出後の状況

モリソン以後,「英語」の用例をしばらく見出すことができない。それは文献における英語への言及自体が少ないからでもあるが，例えばロンドン伝道協会（The London Missionary Society）の設立した英華書院（The Anglo-Chinese College）によって出版された口語英語の入門書では「英吉利話」という名称が使われている。1例を示せば次の通りである。同書の中国語は同校の中国人学生 Shaou Tĭh（小徳）すなわち袁徳輝による。

I have (ママ) Studied English Grammar, Geography, Geometry, Astronomy, and Divinity.
我学了英吉利話的文法書，地理，幾何原本，天文及神天道理
（*The English and Chinese Student's Assistant*, 1826（道光6）年）

モリソンの英文法書に続く「英語」の用例は，20年後の1843（道光23）年に出版された，英国商人ロバート・トーム（Robert Thom，羅伯聃）による英語学習書 *Chinese and English Vocabulary*, Part First ――中国語書名『華英通用雑話』上巻――に見出される。その序文に「英語」が3度現れる。

余寓粤東多年，頗通漢語，然計漢人暢暁英語者，不過洋務中百十人而已。
余故選其貿易中必須之句，訳出漢字英語，纂成書本，使学者有所頭緒，乃能用心，不至諉之無路也。
余願服商賈之業者，尚争先学成英語，早登利路，陶朱可致，猗頓能期。
（Robert Thom *Chinese and English Vocabulary*, Part First, 1843（道光23）年）

同書の凡例では「英話」「英言」などの名称が使われているが，文例ではモリソン『英吉利文話之凡例』の場合に似て英語は「英国話」「英話」と表現されている。

你通得英国話麼 do you understand English? ――英国話通得 I understand English.
英話易学 English is easy. 漢話難学 Chinese is difficult.（同上）

「英語」の中国人による最初の使用は英語学習書『華英通語』の1855（咸豊5）年に刊行された版に見出される。序文と凡例の合わせて3か所に「英語」が現れる。

吾友子卿従学於英人書塾者，歴有年所。凡英邦文字，久深切究，恒慮華言英語，不異北轍南轅。爰将日用応酬事款，別類分門，輯成一帙，名曰華英通語，以公同好。
一　凡所伝之英語因我漢書或無此音，故間有未能畢肖者。然有英字之可考，亦不難於所悟。蓋神而明之存乎其人耳。[28]

28）凡例のこの項目には逐語的に解釈しにくいところがあるが，大意は“本書における英語の発音の漢字表記には不完全なところもある。しかし，語や文を英字でも示してあるので，それを参考にすれば発音が分かるはずだ。”という

一　凡漢字内有小字，務於牙舌唇歯喉五音弁別清楚，方与英語相肖。不然是差之毫釐而謬之千里矣。
（子卿著，何紫庭序[29]『華英通語』，1855（咸豊５）年）

周（2004）[30] は序文の「英語」に触れ，著者はその直前の「華言」の対偶として「英語」という表現を臨時に作り出したに過ぎず，当時「英語」はまだ“正式な術語”ではなかったと述べている。しかし，凡例では「英語」が独立の語として使われているので，その名称はすでに普及し始めていたと考える必要がある。

『華英通語』においても，文例における英語の名称は「英語」ではなく「英国話」「喫咭唎話」である。「英吉利話」「英国話」と「英語」の使い分けは，日本語における「イギリスことば」と「英語」の関係に平行していると言える。

19世紀の中国資料中に使用を確認できた英語の名称を語末の形に基づいて整理して示せば次の通りである――１語化していない「英国之語」も併せて示す――。ほかにも書きことばに重点があると見られる「英文」と「英字」の名称もあるが，ここでは調査の対象外とした。

普通名詞なし：英吉利
「～話」：英吉利国話，英吉利話，英国話，英話，紅毛番話，紅毛話
「～語」：英語，英国之語
「～言」：英言

3.4 「英語」の普及

19世紀後半には中国人による質の高い語学書の出版が始まり――唐廷枢『英語集全』（1862（同治１）年），莎（さ）夢巌輯『英語官話合講』（1865（同治４）年），譚達軒『華英字典彙集』（1875（光緒１）年），楊勲『英字指南』（1879（光緒５）年），鄺（こう）其照『字典集成』（1885（光緒11）年）など――，その多くに「英語」が現れる。

口語的な文脈における「英語」の初出例は1885（光緒11）年に出版された鄺其照の英会話学習書に見出される。

Do you speak English? 汝能講英語否―― A little, not much, Sir. 些少，不多，駕上
（Kwong Ki Chiu *The First Conversation-Book*『英語彙腋初集』，1885（光緒11）年）

調査によって確認できた，書籍における「英語」の用例は散発的であるが，日刊紙『申報』には1872（同治11）年における創刊の直後から「英語」は現れ，「英語」以外の名称の使用は少ない。『申報』の検

ことであろう。

29）子卿も何紫庭も人物は特定されていない。それらが実在の人物の実名であったかどうかは不明である。

30）周（2004）の存在を知り，読むことができたのは孫建軍氏のご好意による。

索サイト「申報館」(http://www.sbsjk.com/）での検索結果に基づいて「英語」とそれに次いで多い「英話」の５年ごとの用例数を表の形にまとめれば表１の通りである[31)]。「英語」が「英話」を含む他の名称を使用頻度において圧倒している。

表１　『申報』における「英語」「英話」の用例数

	英語	英話
1872～1876年	31	4
1877～1881年	51	6
1882～1886年	61	0
1887～1891年	69	4
1892～1896年	48	1
1897～1901年	50	0

20世紀に入っても『申報』には「英話」や「英吉利話」「英吉利語」「英国語」の名称も散発的に現れるが，用例の統計から19世紀のうちに「英語」への統一が進んだと判断することができる。もっとも，新聞記事には口語的な性質を持つ「～話」は現れにくいので，『申報』の調査を通して知り得ることは書面語における状況に偏っていることにも注意が必要である。口語的な文脈における「英語」の普及，標準化の過程を確かめるにはさらなる調査が必要である。

4　「英語」に関わる日中両語の関係

「英語」の日中両語間における影響関係の問題は，名称の発生と普及の２つの局面に分けて考える必要がある。なぜならば，「英語」の初出は中国が早く，その普及は日本が早いからである。もし発生に関して影響があったとすれば，「英語」は中国で作られて日本に伝播し，また，普及に関して影響があったとすれば先に日本で普及してそれが中国での普及をもたらしたことになる。

4.1　名称発生の局面

まず「英語」の発生について言えば，その日中を通じての初出は1823（道光３）年のモリソン『英吉利文話之凡例』，日本での初出は1840（天保11）年の渋川敬直訳述『英文鑑』ないし1851（嘉永４）年の西成量他編『エゲレス語辞書和解』であった。そのことだけに基づいて考えれば渋川や西が中国語から「英語」を借用したようにも見える。

しかし，英国の言語を漢字表記語によって簡潔に表そうとしたときに選べる名称の可能性は限られており，日中各語で造語が行われてその結果が一致したとしても不思議ではない。「英吉利」を短縮するには「英」とするのが最も自然な方法であり，言語を１字の漢語で表そうとすれば「語」「言」「話」など

31）検索結果には無用のものも含まれるが――例えば，「英言」の検索結果に「華英言語」が含まれるなど――，その数は少なく，「英語」の名称の使用状況を見るうえで実質的な影響はない。

のいずれかになる。日本では早くからオランダ語すなわち「和蘭」「阿蘭陀」の言語を「蘭語」とも呼んでいた。例えば，杉田玄白訳『解体新書』（1774（安永２）年）や大槻玄沢撰『蘭学階梯』（1788（天明８）年）にその使用が見出される。

実際，『エゲレス語辞書和解』の序では，「英語」を最初から所与の名称として使っているわけではなく，「暎咭唎語」を短縮して「暎語」とした過程を見て取ることができる。そしてまた，モリソンが「英語」に先行して使っていたのは「英吉利話」「英吉利国話」であり，「英吉利語」ではない。日本語では長期にわたって広く使われた「英吉利語」という名称は，調査の限りにおいて，モリソンの著述のみならず当時の中国の文献中に見出されない（3.2）。加えて，モリソンの著作では一貫して「暎咭唎」ではなく「英吉利」の表記が使われており[32]，また，中国の文献中に「暎語」の表記の出現は確認できていない。そうしたことに基づいて筆者は，日本語における「英語」は，構成要素の「英」と「語」は中国語に由来するが，「蘭語」と同じく日本で独自に組み立てられた名称であったと推定する。さらに言えば，日本語あるいは中国語の内部においても「英語」の初期のすべての出現事例のあいだに継承の関係があったとも限らない。要するに，“英吉利の言語”を短い漢字語で表そうとすれば誰が造語しても「英語」になる可能性が十分にあったということである。

以上の推定が正しければ，「英語」は沈（1998）の言う「偶然の一致による同時発生」――この「同時」は必ずしも完全な同時ということではなく，当時の情報伝達の速度に鑑みて多少の時間差は許容される――の事例の１つであることになる。沈によれば，同時発生は語数は非常に少ないが，直訳による造語の場合に生じやすい。「英語」も直訳語と同じく「英（吉利）＋語」という透明性のある造語であった[33]。

4.2　名称普及の局面

「英語」の普及は年表に見る通り日本が早く，1854（安政１）年の確実な初出以後ほぼ毎年用例が見出される。会話文における初出は，調査で確認できた限りでは，日本資料では1861（文久１）年であるが，中国資料では1885（光緒11）年である。

しかし，中国ではモリソンの著作以後散発的ながらも「英語」が現れ，『申報』においては1872（同治11）年以後しばしば使われている。それらの時期からすれば，中国における「英語」の普及は少なくとも初期の段階については日本とは関わりのない現象であったと考えられる。ただし，19世紀末以後の日本との関わりが中国における「英語」の普及，「英語」への統一を促進した可能性はある。1898（光緒

32）モリソンは英華辞典（3.2）で，“発音だけを表す各字に「口」が添えられることがよくあるが，それは不必要な付け足しである”と述べている。

33）「英語」が訳語であるかどうかは一考を要する問題である。佐藤（2007）は「英語」を「英語 English Language の訳語」と説明しているが，疑わしい。おそらく佐藤は「英語」と‘the English language’が対訳の関係にあるという事実から短絡的にそう判断したのであろう。しかし，私見によれば，少なくとも日本語においてはおそらく「諳厄利亜語」も「イギリスことば」も「英（吉利）語」も“イギリスの言語”を表すために固有名詞と普通名詞を組み合わせて作られた，翻訳の過程を経ていない複合語である。それらの語を最初に使った日本人が‘the English language’という英語表現を知らなかった可能性も高い。これとは対照的に中国においては，「英語」の発生の局面に英国人が関与しており，それが現に訳語として作られた可能性も考え得る。

24）年の『訳書公会報』第15冊に掲載された安藤虎雄撰「日清英語学堂記」という記事では上海米国租界における「日清英語学堂」の創設が述べられている。しかし，19世紀後半以後の中国における英語の名称の使用状況は十分調査できておらず，ここでは明確なことを述べることができない。

結局，筆者の調査の限りにおいて，推定される結論は，「英語」の発生も普及も日中各語でそれぞれに独立に生じた事象であったということになる。影響関係の認定は新たな証拠の発見に待たなければならない。

5　おわりに

19世紀の日中両語における英語の多様な名称の使用状況を観察し，「英語」の語史を推定した。いずれの言語においても，「英語」は当初書面語の表現として，平易な「イギリスことば」や「英吉利話」などの名称と対比を成していた。しかし，時代の進行とともにそれが社会に普及，大衆化し，口語の領域でも広く通用するようになった。その点に関して「英語」は両語において平行的な歴史をたどったことになる。しかし，「英語」の発生や普及に関して両語間の影響関係を示す証拠は見出すことができなかった。

将来の研究によって，19世紀末以後の中国における「英語」の一般化の過程が解明されるとともに，「英語」の語史の理解がより正確なものになることを期待したい。

文献

荒尾禎秀（1983）「イギリス（英吉利）アンゲリア（諳厄利亜）」佐藤喜代治編『講座日本語の語彙 第８巻 語誌Ⅰ』（明治書院）
荒木伊兵衛（1931）『日本英語学書志』（創元社）
内田慶市・沈国威編（2009）『言語接触とピジン―19世紀の東アジア―』（白帝社）
王敏東（1995）『外国地名の漢字表記についての通時的研究』（大阪大学博士論文）
古賀十二郎（1947）『徳川時代に於ける長崎の英語研究』（九州書房）
佐藤亨（2007）『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』（明治書院）
沈国威（1998）「新漢語研究に関する思考」『文林』第32号（神戸松蔭女子大学国文学研究室）
杉本つとむ（1985）『日本英語文化史の研究』（八坂書房）
杉本つとむ編著（1993）『英文鑑 資料と研究』（ひつじ書房）
孫建軍（2015）『近代日本語の起源―幕末明治初期につくられた新漢語―』（早稲田大学出版部）
竹村覚（1932）「我が国に於ける英国国号」『英文学研究』第12巻第３（ママ）（日本英文学会）
田野村忠温（2018）「新出資料『華英通語』道光本と中国初期英語学習書の系譜―附論 福沢諭吉編訳『増訂華英通語』―」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第58巻
陳力衛（2011）「近代日本の漢語とその出自」『日本語学』第30巻第８号
中村士（1993）「江戸の天文方」『天文月報』第86巻第12号（日本天文学会）
韩丽娜（2008）『《英吉利国译语》研究』（吉林大学硕士论文）
黄兴涛（2010）「《啖咭唎国译语》的编撰与“西洋馆”问题」『江海學刊』2010年第１期
杨慧玲（2012）『19世纪汉英词典传统―马礼逊，卫三畏，翟理斯汉英词典的谱系研究―』（商务印书馆）

杨玉良（1985）「一部尚未刊行的翻译词典—清官方敕纂的《华夷译语》—」『故宫博物院院刊』1985年第４期
周振鶴（2004）「“英语”与“英文”的首创权」『东方早报』２月６日［参照は周振鶴『知者不言』（2008年，生活・读书・新知三联书店）所収の版による。］
邹振环（2007）『西方传教士与晚清西史东渐—以1815至1900年西方历史译著的传播与影响为中心—』（上海古籍出版社）
邹振环（2008）「《外国史略》及其作者问题新探」『中山大学学报（社会科学版）』第48卷第５期
이한섭・박성희편（2017）『개화기 외국지명 표기사전』（고려대학교출판문화원）［李漢燮・朴省姬編『開化期外國地名表記辭典』（高麗大學校出版文化院）］
丁若鏞（金誠鎭編）（1938）『與猶堂全書』第１集第22卷（新朝鮮社）
Fuchs, Walter（1931）‘Remarks on a new “Hua-I-I-Yü”’. *Bulletin of the Catholic University of Peking*, No. 8.（『輔仁英文學誌』第８期）
Hunter, William C.（1882）*The ‘Fan Kwae’ at Canton Before Treaty Days 1825-1844*. London: Kegan Paul, Trench, & Co.［扉における著者名の表示は An Old Resident。著者名は跋文に W. C. H. とのみ記されている。］
Williams, Samuel Wells（1836）‘Jargon spoken at Canton: how it originated and has grown into use; mode in which the Chinese learn English; examples of the language in common use between foreigners and Chinese’. *The Chinese Repository*, Vol. 4, No. 9.

英語名称年表

	日本資料		中国資料	
	資料名	英語の名称	資料名	英語の名称
1602(慶長17, 万暦30)			[Ricci 坤輿万国全図※	諳厄利亜]
1612(慶長17, 万暦40)	[以心崇伝 異国日記(～1613)※	おふ(ママ)ぶりたんや国, 大ぶりたんや国, いがらたいら, いんきらていら, 伊伽羅諦羅国, イギリス, 英圭黎他]		
1623(元和9, 天啓3)			[Aleni 職方外紀※	諳厄利亜]
1674(延宝2, 康熙13)			[Verbiest 坤輿全図	昂利亜(国)]
1695(元禄8, 康熙34)	[西川如見 華夷通商考※	エケレス, イキリス, インゲレス]		
1708(宝永5, 康熙47)	[西川如見 増補華夷通商考※	ヱゲレス, イキリス, インキリヤ, 諳厄利亜]		
1715(正徳5, 康熙54)?	[新井白石 西洋紀聞※	アンゲリヤ, エンゲルタイラ, インゲラント, イギリス, 漢乂利亜, 諳厄利亜他]		
1720(享保5, 康熙59)	[西川如見 長崎夜話草※	ヱゲレス, 諳厄利亜(いんげりや)国]		
1725(享保10, 雍正3)?	[新井白石 采覧異言※	(『西洋紀聞』にほぼ同じ)]		
1730(享保15, 雍正8)			[陳倫炯 海国聞見録	英機黎]
1750(乾隆15)年ごろ?			[暎咭唎国訳語	暎咭唎国]【最初の英華対訳語彙集】
1761(宝暦11, 乾隆26)			[皇清職貢図1	英吉利(国)]
1774(安永2, 乾隆39)	[杉田玄白訳 解体新書	蘭語]		
1785(天明5, 乾隆50)	[長久保赤水 山海輿地全図説※	インケラント, 諳厄利亜(アンケリヤ)]		
1787(天明7, 乾隆52)	[森嶋中良編輯 紅毛雑話	諳厄利亜(あんげりや)他]		
1788(天明8, 乾隆53)	[大槻茂質撰 蘭学階梯	諳厄利亜(インギリス, イギリス), 蘭語]		
1789(寛政1, 光緒4)	[朽木昌綱 泰西輿地図説1,5	ゴロヲトブリタニヤ, ヱンゲランド]		
1791(寛政3, 乾隆56)	[桂川甫周 翻訳地球全図略説2	大貌利太泥亜(コロートブリタニヤ), 諳乂利亜(アンゲリア)]		
1793(寛政5, 乾隆58)			[欽定秘殿珠林石渠宝笈続編15	英吉利国人]
1794(寛政6, 乾隆59)	[桂川甫周 北槎聞略	大貌利太泥亜, 諳厄利亜(国)]		
1798(寛政10, 嘉慶3)	[熊秀英 蛮語箋 [本多利明 西域物語	大貌利太泥亜(ゴロートボルタニヤ)] エゲレス, 諳厄利亜(エンゲレス)]		
1801(享和1, 嘉慶6)	山村才助 西洋雑記※	諳厄利亜ノ語【英語への日本初言及】		
1803(享和3, 嘉慶8)			[洪亮吉撰 乾隆府庁州県図志50	英吉利, 英圭黎国]
1804(文化1, 嘉慶9)	[山村才助撰 訂正増訳采覧異言	(『采覧異言』にほぼ同じ)]	[邵晋涵 南江文鈔2	英吉利]
1805(文化2, 嘉慶10)			[Drummond輯 暎咭唎国種痘奇書	暎咭唎(国)]
1807(文化4, 嘉慶12)	[津太夫・大槻玄沢 環海異聞	諳厄利亜(アンゲリア, イングリア)他]	Raper抄 字彙英吉利略解	英吉利【言語名初出】
1809(文化6, 嘉慶14)	小原巴山他 長崎志続編	諳厄利亜言語【言語名日本初出】		

1810（文化7, 嘉慶15）	吉雄権之助他 諳厄利亜言語和解 ［奥平昌高 蘭語訳撰※	諳厄利亜言語 諳乂利亜（アンゲリア），諳厄利亜（イギリス）］		
1811（文化8, 嘉慶16）	本木正栄他 諳厄利亜興学小筌※	諳厄利亜国語，諳厄利亜（アンゲリヤ）語*		
1814（文化11, 嘉慶19）	本木正栄他 諳厄利亜語林大成※	諳厄利亜語，諳厄利亜		
1818（文政1, 嘉慶23）	［俣野通尚編補 倭節用集悉改嚢	いぎりす］		
1819（文政2, 嘉慶24）			Medhurst 地理便童略伝 ［Morrison 西遊地球聞見略伝 ［Morrison 五車韻府	英吉利話 英吉利（国）］ 英吉利国，英吉利国人］
1820（文政3, 嘉慶25）			［謝清高 海録※	暎咭利国，紅毛番］
1822（文政5, 道光2）	馬場佐十郎 諳厄利亜語集成（この頃）※	諳厄利亜語	Morrison *Eng.-Chi. Dictionary*	英吉利国話［，英字，英文，英国］
1823（文政6, 道光3）			Morrison 英吉利文話之凡例※	英吉利話*，**英語**【「英語」初出】
1824（文政7, 道光4）	［小原巴山他 長崎志続編	諳厄利亜文字言語修行稽古］	［Medhurst 特選撮要毎月紀伝7月	英吉利（国）］
1826（文政9, 道光6）	近藤正斎 好書故事79	諳乂利亜語	*Eng.&Chi. Student's Assistant*	英吉利話*，英吉利*
1828（文政11, 道光8）			［Gonsalves 辣丁字文	英吉利国］
1832（天保3, 道光12）	［山村才助 西語名字考	諳厄利亜，諳乂利亜，ゴロヲトブリタンニア］	［Morriosn 大英国人事略説	英吉利国，英国］
1833（天保4, 道光13）	［ヒスセル 日本風俗備考※	英吉利］	［Gützlaff 東西洋考毎月統記伝9月※	英吉利、英国］
1837（天保8, 道光17）			Gützlaff 東西洋考毎月統記伝1月※ 紅毛番話の類（この頃以後出版）	英話 紅毛番話
1839（天保10, 道光19）	［渡辺崋山 慎機論※	英吉利斯国］		
1840（天保11, 道光20）	渋川敬直 英文鑑※	諳厄利亜語， 英語【「英語」日本初出（“英単語”の意）】		
1841（天保12, 道光21）			Legge *Lexilogus* Dean *Tie-chiw Dialect Lessons*	英国之語* 英吉利話
1842（天保13, 道光22）			Williams 拾級大成	英話，暎話
1843（天保14, 道光23）			Thom 華英通用雑話 上	英国話*，英話*，**英語**，英言
1844（弘化1, 道光24）	［箕作省吾 新製輿地全図※	大貌利太泥亜，暎咭唎（エケレス）］	［徐継畬 瀛環考略	英吉利，英圭黎，膺吃黎，英倫的］
1845（弘化2, 道光25）			［梁廷楠撰 英吉利国記	英吉利（国），英圭黎，英機黎他］
1846（弘化3, 道光26）	［銅版万国輿地方図※	英国］	［梁廷楠撰 海国四説	英吉利（国），英国］
1847（弘化4, 道光27）	［箕作省吾 坤輿図識2,4,補3※	（『新製輿地全図』にほぼ同じ），暎国］	Morrison 外国史略※（この頃完成）	**英語**
1848（嘉永1, 道光28）			［徐継畬 瀛環志略7	英吉利，英機黎，英圭黎，膺吃黎， 諳厄利，英倫的，及列的不列嚬］
1849（嘉永2, 道光29）	［嶺田雋撰 海外新話※	英吉利国，英国，暎国他］	鄭仁山 華英通語	英話*
1850（嘉永3, 道光30）	時規（とけい）物語※	ヱギリス語（コトバ？ゴ？読み不詳，以後も同様）		
1851（嘉永4, 咸豊1）	西成量他編 エゲレス語辞書和解	エゲレス語，暎咭唎語，**暎語**【日本初出】		

1853（嘉永6, 咸豊3）			Bonney *Canton Phrases*	英話*, 英吉利*
1854（安政1, 咸豊4）	下田条約（嘉永7/5/22） 英海軍長崎奉行宛書簡（西暦9/7） 外国事件書類雑纂9（嘉永7/8/18） 村上英俊 三語便覧 ［日英和親条約（8/23）※	ヱゲレス語 ヱゲレス語 ヱゲレス語 英傑列語（エゲレスコトバ）, **英語** 英国］	Bonney *Canton Vocabulary*	英話*, 英吉利*
1855（安政2, 咸豊5）	下田奉行書簡（安政1/12/6） 村上英俊 仏英訓弁 カラーメル著 小関高彦訳 合衆国小誌	ヱケレス語 英傑列斯語, **英語** **英語**	子卿 華英通語※	**英語**【中国人著作初出】, 英国話*, 嘆咭唎話*
1856（安政3, 咸豊6）	村上英俊 五方通語 外国事件書類雑纂10（9/12）※ ［大庭雪斎 訳和蘭文語	英傑列斯語 **英語** 嘆咭唎（エンゲリ）語法学］	Legge 智環啓蒙塾課初歩 Legge 遐邇貫珍3-6 Muirhead訳 大英国志	英話 英話 **英語**, **旧英語**, **中英語**, **今日英語**
1857（安政4, 咸豊7）	横山保三訳 魯敏遜漂行紀略 村上英俊蔵板 英語箋 伊東貫斎 米官吏書付和解（7/20）	英吉利語（イギリスコトバ） **英語**【書名初出】 **英語**	Wylie 六合叢談1-2他※	**英語**
1858（安政5, 咸豊8）	日米修好通商条約（6/19） 日英修好通商条約（7/18）	**英語** **英語**	中英天津条約※	**英語**
1859（安政6, 咸豊9）	中浜万次郎訳 英米対話捷径 本木昌造 和英商売対話集	いきりすことば*, **英語***【会話文初出】 **英語**		
1860（万延1, 咸豊10）	清水卯三郎 ゑんぎりしことば 小嶋雄斎輯 商用通語 松園梅彦輯 五国語箋 福沢諭吉編訳 増訂華英通語※ 小原竹堂校 商貼外和通韻便宝 玉虫左太夫 航米日録8※	ゑんぎりしことば イキリス語［, 英蘭ノ二語］ 英吉利（エキリス）語 イギリスコトバ*, **英語** **英語** **英語**	子芳 華英通語 馮沢夫他 英話註解	英国話*, 嘆咭唎話*, **英語** 英話
1861（文久1, 咸豊11）	Murray 英吉利文範二編 石橋政方 英語箋	英吉利 **英語***		
1862（文久2, 同治1）	ウエンリイト 和英商話	インゲリシゴ*, インゲリシクチ*他	唐廷枢 英語集全	**英語**【中国書名初出】
1863（文久3, 同治2）	Brown *Colloq. Japanese* Alcock *Dialogues in Japanese* 村上英俊閲 英語箋後編 日米通商約定	Ingrisz no kotoba* ヱゲレスゴ* **英語** **英語**		
1864（元治1, 同治3）	村上英俊 仏語明要 香港新聞紙1073※	英吉利語［, 仏語］ 英話	Lobscheid 英話文法小引 Martin訳 万国公法※	英話 **英語**
1865（慶応1, 同治4）			莎夢巖輯 英語官話合講	英話*, **英語**
1866（慶応2, 同治5）	足立梅景編述 英吉利文典字類 開成所 英語訓蒙 初篇 開成所 英語階梯	英吉利 **英語** **英語**	Lobscheid 英華字典（～1869）	英話*, 紅毛話, **英語**

1867（慶応3, 同治6）	福沢諭吉 西洋旅案内 阿部友之進 挿訳英吉利文典 Hepburn 和英語林集成 阿部櫟斎 絵入英語箋階梯	英吉利の言葉, 英吉利の語（ことば） 英吉利 **英語**（エイゴ）［, 伊幾里須（イギリス）］ **英語**（ゑいご）	Wade 語言自邇集	英国話*
1868（明治1, 同治7）	ガラタマロ授 英蘭会話篇訳語	**エイゴ**	鄺其照 字典集成	英話
1869（明治2, 同治8）	吉田賢輔纂輯 西洋旅案内 外篇 高橋新吉他編　和訳英辞書 安田為政撰 当用英語集 品川英輔 英語通弁階梯初編	**英語** **英語** **英語** **英語***		
1870（明治3, 同治9）	西周口述 永見裕筆録 百学連環 岸田吟香撰 英語手引草 弄月亭陳人 童解英語図会	**英語** **英語** **英語**		
1871（明治4, 同治10）	青木輔清 横文字独学 久米邦武 米欧回覧実記1※ 前田正穀他編 和訳英辞林 ［橋爪松園輯 英算独学	英吉利語（エギリスコトバ）* **英語** **英語** 英語（“英単語”の意）］	Lobscheid 漢英字典	**英語**
1872（明治5, 同治11）	尺振八・須藤時一郎 傍訓英語韻礎 青木輔清訳 英会話独学 松岡章編 和英通語 島一悳訳 挿訳英吉利会話篇2 佐藤重親 英語学捷径 ピネオ 通俗英文典 山田正精訳 英学必携 コレンソ著 柳沢信大訳 代数学啓蒙1	英（イキリス）語, 英吉利語（いぎりすことば） 英語（イギリスコトバ）* イギリス詞（コトバ）* イギリスコトバ*, **エイゴ*** イギリスゴ* **英語** **英語** 英話	申報5/27 （以後の号にも「英語」反復出現）	**英語**
1873（明治6, 同治12）	松本孝輔 英和通語 文部省 外国語学校教則 堀江景宣 英和初歩 成性主人纂加 英語傍訓実語教 Satow *Kuaiwa Hen*	English-kotoba* **英語** **英語** **英語** Yeigo		
1874（明治7, 同治13）	梅浦精一他編 英語掌中熟語箋 読売新聞12/28	**英語** **英語**	Williams 漢英韻府 申報12/16	英話 英話
1875（明治8, 光緒1）	ブリンクリ 語学独案内 文部省年報1 東京英語学校教則	**英語** **英語** **英語**	鄺其照 字典集成 2版 譚達軒 華英字典彙集	英話 英話
1876（明治9, 光緒2）	文部省年報2 長崎英語学校学歳第1報	**英語** **英語**	［張徳彝 四述奇（～1880）	英格蘭］
1877（明治10, 光緒3）	大阪英語学校舎則	**英語**	Bruce 英華常語合璧	英国話, 英話
1878（明治11, 光緒4）	Brown *Mastery System Applied to Japanese*	eigo*		

1879(明治12, 光緒5)	チヤムブレン 英語変格一覧 津田仙他訳 英華和訳字典	**英語** **エイゴ**	楊勲 英字指南	英国語, **英語**[, 美国語]
1880(明治13, 光緒6)	文部省年報6 参訂漢語問答篇国字解 新校語言自邇集 散語之部 Imbrie *Eng.-Jap. Etymology*	英吉利語, **英語** **英語** **英語** Yeigo*		
1881(明治14, 光緒7)	中村順三郎 童蒙英語初学 久米原雪谷編 真草英語選	**英語** **英語**		
1882(明治15, 光緒8)	柴田昌吉他 増補訂正英和字彙 ウエブストル氏英学独案内	英吉利語 **英語**	Condit 英語入門 Condit 英華字典	英話*, **英語** 英国話, **英語**
1883(明治16, 光緒9)	片岡正行 英語独学便法 コックス 克屈文典直訳 井上蘇吉編 英和語学独案内	**英語** **英語** **英語**		
1884(明治17, 光緒10)	矢田堀鴻訳 英華学術辞書 佐野正道編 弁士必携英語節用集 ピネオ 英語作文手引	**英語** **英語** **英語**		
1885(明治18, 光緒11)	前田元敏訳 英和対訳大辞彙 永井尚行 新撰初学英和辞書 岡倉真範 英語綴字軌範	英吉利語(ゴ) **英語** **英語**	鄺其照 英語彙腋初集	英話*, **英語***【中国会話文初出】
1886(明治19, 光緒12)	市川義夫 英和和英字彙大全 秋庭浜太郎編 内地雑居交通宝鑑 永田義原編 商人必携英語活用弁 Ooi *Eng.-Jap. Conversations*	英吉利語, **英語** **英語*** **英語** Yeigo*		
1887(明治20, 光緒13)	教育時論83 ブーロトン 近世日耳曼 小島正忠 英語和解西洋将棋使用法 片山清太郎 警官必携英語学	イギリス語 英吉利語 **英語** **英語**		
1888(明治21, 光緒14)	柴田昌吉他 附音挿図増補英和字彙 ウエブスター氏新刊大辞書和訳字彙 鄭永邦 日漢英語言合璧 Chamberlain *Colloq. Japanese*	英吉利語(ゴ) **英語** **英語** Eigo*		

凡例・注

1) この年表は19世紀終盤までの日中の資料における英語の名称の出現状況を示す。ただし、「英文」「英字」は対象外とする。また、国名ほかの関連語の用例は [ ] に入れて示す。
2) 漢字表記に振り仮名などの形で添えられた読みは ( ) に入れて示す。
3) 英語の名称のうち「英語」はゴシック体で示す。ただし、エイゴ以外の読みの与えられたものは除く。
4) 英語の名称のうち会話文の文脈で用いられたものには「*」を付して示す。
5) 資料名は記入スペースの制約上必要に応じて調整して示す。資料名の後ろに付した「※」は当該の用例が過去の研究ですでに指摘されていることを示す。
6) 用例は基本的に現物ないしその影印によって確認したが、それができない少数のものは翻刻テキストによった。用例における誤字は訂正して記載する。